

1 研究テーマ 特別支援学級在籍の児童への読み書きの指導と支援  
～カタカナ、漢字の読み・書きの指導を通して～

2 はじめに

所属校では、一人一人の特性に応じた指導を学校体制で進めることを学校の課題としている。しかし、児童の実態を把握することの難しさからどう指導してよいのか、悩むことが多い。普段の学習の中で実態が把握できるような指標があると、指導に役立てることができるのではないかと考える。

3 研究目的

読み書きの困難さを軽減し、学習に意欲的に取り組めるようになるために、困難さの特徴を実態把握し、読み書きの力を高める指導方法を探りたい。

4 研究内容

(1) 特別支援学級（第3学年）の児童への読み書きの指導について

① 読み書きの力をつける指導について



**ひらがなカード**  
フラッシュ読み

ま	そ	た
ふ	ぬ	ら
こ	ひ	ね
み	り	け
か	よ	あ

・教材：ひらがな1文字のカード 15枚1セット  
・実施方法：1枚1秒(計15秒)を目標に1日3回練習する。1週間同じセットを練習し、15秒の目標を達成したら次のセットに代わる。

**文章読み時間**  
読むスピードが速くなった。

**誤読率**  
誤読が減少

**ひらがな表**  
書き写し

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	あ
を	り	ゆ	み	ひ	に	ち	き	い
ん	る	よ	む	ふ	ぬ	つ	す	く
れ	め	へ			わ	て	せ	け
ろ	も	ほ			の	と	そ	こ

・教材：清音46文字のひらがな表 46文字の表を2枚に分けた1枚分を1日分とする。  
・実施方法：毎日の宿題で書き写す。毎日1枚ずつ、1週間交代で練習する。

**書きつまり時間(秒)**  
書きつまりなし

**書き間違い数(個)**  
書き間違いなし

**指導後の姿** 読み書きの技能の向上 意欲の向上 学習態度の向上

② 指導の効果を見るための授業実践 指導単元：三年下世界の民話を読もう「木かげにごろり」

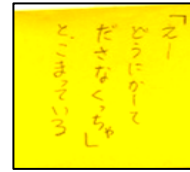
ア 目的 授業の中で指導の成果が表れているか確かめる。

イ 方法 ・読む力を確かめる：「おひさまをほしがったハヌマン」を1人で読ませる。  
 ・書く力を確かめる：民話の150文字程度の「紹介カード」を書かせる。

ウ 意欲を支えるための支援の例

- ・読む量・書く量を限定する。
- ・教師の範読を聞く。
- ・本児の感想を教師が付箋にメモする。(写真)
- ・文章のモデルを提示する。

ちょっと頑張れば  
できそうな量



(教科書や絵本に貼って残す)

エ 結果

実際の授業の中で、「読むこと」「書くこと」の目標が達成された。

(2) 通常学級の児童の読み書きの困難さを見取る目安を探るための基礎調査

① 目的 通常学級の児童のうち、読み書きに困難さを示している児童を、普段の学習で見取る目安を持つために読み速度や漢字書取りの間違い分析をし、困難さを見取る視点について探る。

② 読みの調査 第2学年 1学級 実施

光村図書 二年教科書「黄色いバケツ」より 131文字(自作)

自作のテスト

きつねの子は、しゃがんで、バケツにかおをちかづけました。中の水に、かおがうつりました。きつねの子は、あかんべをしました。べろをちよろりと出しました。にこつとわらいました。  
 それから、立ち上がって、バケツをかた手でさげました。きつねの子がもつのに、ちょうどいい大きさでした。

既存のテスト

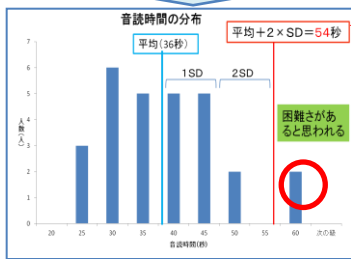
既存のテストを参考データとして実施  
(単文音読テスト 稲垣他 2010)

青い丸にさわってから赤い四角にさわってください。

黒い四角の上に赤い丸をおいてください。

赤い丸ではなくて白い四角をとってください。

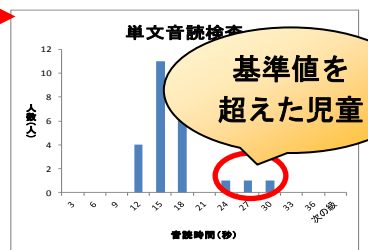
タイム計測



ほぼ一致

音読時間 **54** 秒は、読みの苦手さを見取る目安として妥当

タイム計測



基準値を超えた児童

③ 書きの調査 全学年 1学級実施

基準値を超えた児童と基準値内の児童の

誤答の種類別に児童1人当たりの書き間違い数の平均を比較

	無答	実在する漢字			実在しない漢字	
		同音	意味	形	部分	配置
間違いの数が基準値を超えた児童の平均	4.6	2.2	0.6	0.9	3	0.2
基準値内の児童の平均	0.36	0.56	0.08	0.33	0.6	0.07

① 約 **12** 倍

② 約 **7** 倍

③ 約 **5** 倍

書きの困難さを見ていく視点

① 無答 (空欄)

② 似た意味

③ 部分の間違い

の順に見ていくと良い。

5 研究のまとめ

学習への意欲を支えるために困難さを軽減し、特性に応じた支援を行うことが指導者に求められていることを実感することができた。

読みと書きの調査から、読みの困難さは、読む速さが目安として有効であることが分かった。書きの困難さは、間違いの質を見ていくことによって見取ることができるのではないかと考えられる。

6 今後の課題

今年度の研究を応用して、読み書きの困難さを軽減する指導法についても探っていきたい。

7 おわりに

読み書きの困難さを見取る目安が見えてきたが、所属校でも共有し、活用していきたい。